

六

花



7

2023

りっかはいくかい

夢人中

山田 六甲

ずんだ餅ぼくは半殺しを望む
萍や動くともなく濠の水
石罫玉水に吸ひつかれて消ゆる
石橋の人影に跳びあめんぼう
ほうたるの内子宿間に狂ふ頃
暗闇を育てて蛭さみしかり
暗闇のベールへ入りゆく蛭
十割や祖母のうちたる冷し蕎麦
走る子のかかとに汚れ夏まつり

真田修予君

梅雨晴間風あぢさゐの色直し
蝸ざりもがにもさざりも美味か冷し酒
雨あがり蛭は闇を眠らさず
岩牡蠣をすすりて次の間に枕
もさ海老の塩焼き弁当予約せむ
畔神の風呼びて発つ天道虫
燭妖し土佐の絵金の夏祭
お菊虫ぢやかう揚羽へ夢人中
高慢な弟子は七夕流しかな
青紫蘇を刻んでナポレオンパスタ
本島に隠れし島の秋初め
夕顔に帰りて祭笛さらふ

使用人部屋の木目込み雛人形 升田ヤス子

昔は使用人や執事の為の部屋があった。ヤス子の見た使用人部屋にはそれに相応しい質素な木目込みの雛人形、おそらく箆笥の上かに飾ってあったのだろう。それで使用人には幼い女の子がいたと分かる。使用人家族のささやかな幸福の雛祭りを想像して、切なく温かい。(六甲)

うたたねの西行に散る桜かな 江見 巖

「うたたねの西行」に注目。西行については様々な憶測諸説があるが、私なりに調べて、三年になる。ようやくその原因が臆気に見えてきたところ。西行は桜散る如月の十五日に死んだ。旧暦の如月は桜も咲いていたに違いない。桜の花の下で、転寝をするように西行は亡くなったのだろう。うたたねというのはこの世の仮の姿で、予定通りうたたねのように生きて、死んだ。栄枯盛衰黄梁一炊の夢(一睡)の夢。邯鄲の夢、南柯の夢。(六甲)

卒業の花束影も光りみる

武井 博子

卒業式の日のひとコマだろう。未来を占うように花束の影も光輝いているという表現が上手い。花束を持つ主人公はうれし泣き。その影もが光るといふ虚実の皮膜を詠んだ。きっと花束を抱いている主人公もきつと感激して泣いているにちがいない。泣いている人を直接言わず、花束の影に注目して表現。影が光るわけがないのに物理的事実を超えた詩の力。

雪嶺抄

花万朶 ◎ 笹村 政子

山吹や奥の院へと沢づたひ
 山吹のしだるる影の流れけり
 鳥帰る雨の白杵の磨崖仏
 溪谷の風によどめる鳥の恋
 蓋とればふるさとの香の蓬餅
 正座して吾子の頬張る蓬餅
 関伽桶の伏せてありたる彼岸寺
 目薬の所為にはあらず朧月
 ふるさとの仏供養や月おぼろ
 逝きし子をまなうらにして花万朶

逝きし子をまなうらにして花万朶

政子本人は、「たまには娘の句も詠んでみようと思つて」というが、この人は我慢強い。逆縁で亡くなつたわが子のことは片時も忘れることがあるはずなく、毎月詠んでもいいと思うぐらいた。満開の桜の空を見上げればその向こうには亡くなつたお嬢さんがいるはずで花は映画のスクリーンのように何時までも観飽きない銀幕である。同時作「関伽桶の伏せてありたる彼岸寺」の作品は、関伽桶は佛のため水を汲む桶で、関伽とはもともとアクアで、と書いたところで調べなおしてみた。すると「関伽」は「aqua」ではなく。とつと説があり仏教語「関伽」とラテン語「aqua」が同語源であるとされる俗説がある。しかし、これは正面切つて反論するに値しない、いわゆる語源俗解の好例であるなどという説も。諸説あるが私は（大切な人へ供える命の水）とする説をとる。掲句はその水を入れる桶で寺に備えてある桶だろつ。佳い風景だと思つが人によつてはいかにもお寺的で手帳の句だと言つ人があるかもしれない。寺という場所を言わない方法も。

芹摘んで ◎ 志方 章子

茶摘唄昔のことの蘇る

朝風のはこべるライラックの香り

芹摘んで鍋の支度をしてをりぬ

たんぽぽや親しみやすく飽きやすき

久方に家族揃ひぬ嫁菜飯

控へ目で華やかならむ白木蓮

味噌汁のちしや懐かしき母の味

蕨摘む母煮てくるる約束に

心地よし用件のみの花便り

紫木蓮女のやうな面影に

はまなす抄

猪木目込み雛 ◎ 升田ヤス子

工業松右衛門旧宅（くわいひくまごえむら）

堂々の舟板の扉鱗東風

春の日の手斧はつりの床に射す

使用人部屋の木目込み雛人形

しづもりてただ冴返るおくどさん

志功画のふくよか美人あたたかし

桜二分小鷲は羽を光らせて

紅色のまんさくに雨つのりけり

子のフード母の被せやる花の雨

飛花一片二片三片わが吐息

よなぐもり真つ直ぐあがる湯屋煙

芹摘んで鍋の支度をしてをりぬ

芹を摘んでから鍋の支度をするか、鍋の支度をしてから芹を摘むかがどうなのだろうと考えてみる。芹を摘みに出て、思いのほか立派な芹と瑞々しい芹が摘めたので、芹鍋にしようと思いついたと受け取る。仙台に芹鍋の有名な店があるが、章子の故郷では芹もよく育ち、畑でなく綺麗な水に育った芹が豊富だったにちがいない。芹独特の薫りと味は大人の味覚。芹を摘むのは春の季節だが芹鍋となれば冬の季節になる。さて読者はどちらの季節にして味わうだろうか。味噌汁の句、ちしやを味噌汁に入れたのは私の母も同じことをしていたので懐かしい。またたんぽぽの句も「飽きやすき」が面白い。

使用人部屋の木目込み雛人形

俳句は客観的に物を提示するだけで物語る場合がある。掲句とある古い屋敷の使用人に当てがわれた部屋に木目込み人形の雛があった。それだけで使用人にも家族が居たことが伺えるし、さぞ本屋敷には豪華な雛段が飾ってあったのだろうと伺える。だが使用人にも雛祭りはある。それに適った素朴な雛祭りがあった、木目込み人形の雛を飾ってあったのだろう。家庭の温かさはこちらのほうに感じる。逆にそのことが工業家の豪華な雛祭りも見えてくる。ヤス子たちは最近工業家の旧宅へ吟行にいったという。その吟行で得た俳句を今月は発表。ヤス子はまだまだ健在。夢風撰。

△サワラ漁が始まったら鱗東風（さわらごちち）、ブリの幼魚が漁れる頃の「いなだ東風」など俳句練達の人。

かげろふに ◎ 善野行

褪せはじめほのとかをりぬ雪柳
足音のため息となり花の雨
面腑せの桜に雨のひと雫
金瘡小草見つけて雨の野に屈む
公園の遊具に風の光りけり
肩先に触れて離るる花片かな
石清水八幡宮初参詣
念願のかなへり花の男山
詠へて花明かりさへ京料理
祝・和田桃さん第一句集
目覚むれば南柯の下に生るる蝶
草刈機措けば雲雀の野となりぬ

褪せはじめほのとかをりぬ雪柳

牛肉も果物も腐る一步手前が美味というよつに、匂いもしかり。ただし雪柳の匂いは知らず。しかしこの句は行独特の嗅覚であろう。植物の花は種の保存の為、虫を呼び寄せて受粉の媒介をしてもらおう狙いも。そういう理屈もあるが、掲句はどこか人間臭い所もあってふと気づいたのだろう。香りや匂いには独特のものがあって、いにしえ、白河法王が待賢門院に執着された原因は女院の特殊な匂いにあったのが原因ではなかったかと小説仕立てに推理してみているが、山本周五郎が「栄花物語」にそのようなことを書いていたので、やはりと思った。そのことはそのかみにもあったと推察され、匂いにはただならぬものが潜んでいると思う。この間亡くなった大石悦子さんに「菊枕をはずした時に匂った」というような句もあったような。草刈機と雲雀句は微妙な匂いのつながりが分かるような気がする。俳句が新しい必要はないが、誰も詠まない句に挑むのも必要。

別府抄

春遊び ◎ 廣畑 育子

春遊椰の葉ひとつ守りとす
平らなる石を拾へり春遊
げんげ田の風に吹かれてゐる小鷺
野遊びの広場に和毛横切れり
咲き溢る八重の山吹崖となり
濃山吹ポンポン船の在りし頃
花は葉に国鉄跡のモニュメント
風五月なんじやもんじやの咲くはずぐ
立浪草ボンボン時計聴こゆ庭
恋の色石楠花は幹くねらせり

春遊椰はるあそいの葉ひとつ守りとす

「春遊椰」とは何の植物だろうと考えていたら、どうも春遊びが季題で、その時ナギの葉をお守りにしたという句だと分かった。しらべてみると、「ナギの名が、海の風（ナギ）に通じることから、航海の平穩を祈るご神木となっていることが多い、また、別名がいろいろあるように、葉を葉脈の方向に引っ張ってもなかなか切れない。この強い葉から、「男女の仲を結び付ける力も強いと信じられ、昔は鏡の底にナギの葉をいれ、夫婦の縁が切れないよう、離れていても忘れぬよう、と願った」とあった。意味深い葉である。またナンジャモンジャ」と名付けられる植物の樹種には、ヒトツバタゴのほかにクスノキ（樟）、ニレ（榆）、イヌザクラ（犬桜）ボダイシユ（菩提樹）などがあり注意を要するらしい。椰なぎの木を春の季語として工夫しながら詠むのも育子らしい。

阿閃仏 ◎ 延川五十昭

雨蛙鳴いてをりけり藤の寺
 柴犬の眠れる顔に藤の花
 花藤や和服の帯の合せあり
 山吹の花光背の阿閃仏
 薬師堂うつる田面や藤の花
 石鑿の目荒き羅漢藤の寺
 どの家も藤の苗字や藤の花
 藤懸かる清明塚の棚田かな
 山藤に顔かくれぬる磨崖仏
 和服なる帯のむらさき藤の寺

雉子の声 ◎ 延川 笙子

山笑ふ丹波の里の豆づくし
 蒼天を一直線に雉子の声
 山と山重なり合うて雉子の声
 山門の奥九尺の藤の棚
 薄桃の藤楚々として咲いてをり
 腹いつぱい息膨らませ蛙鳴く
 蛙には蛙の世界蛙の道
 金縁の雨蛙の目濡れてをり
 山のカフェまだ新しき燕の巢
 老鶯の聞き惚れてゐるカフェテラス

山吹の花光背の阿閃仏

「阿閃如来（あしゆくによらい）は十三仏の七回忌導師。三十日秘仏の四日仏。左手で衣の端をにぎっているのが特徴。」と「仏教大辞典」に。掲句は阿閃寺の庭に咲いている山吹の花を佛の光背だと見立てた。さらに「光明皇后が奈良市法華寺町辺に建てたと伝えられる寺で、伝説によると、皇后は浴室を設けて自ら千人の身体を洗う願を立て、これを行なったところ、最後に癩者に化した阿閃如来が現われたとも。光明皇后の名の通り山吹の色と重なって光背に見えた（同辞典）と皇后を称えて詠んだ句であろう。田面の句も写生が効いている。ただしこの句が奈良で詠まれたかどうかは聞いていない。

山と山重なり合うて雉子の声

山と山が重なり合う所で山深い土地に雉子（キジ）の鳴き声が聞こえた。兵庫県でいえば丹波地方か、姫路の奥、佐用、岡山の県境あたりで、キジの声が聞こえた。ことわざに「キジも鳴かずは撃たれまい」の言葉の意味は、無用のことを言わなければ、禍いを招かないですむことのとえ（広辞苑第6版）がある。だが雉は子どもを守るために巢から離れたところで鳴くという。だから、あれは、母が撃たれようという親雉の覚悟の「犠牲心」なのである。撃たれたたれたふりをする。雉や鳥が落ちた辺りを探してもいない場合が多い。十年ほど前に私は神戸西区の伊川河川敷で雉と蛇が雛の巢の前で戦っているのを見たことがある。雉は蛇に向かって果敢に戦っていた。しばらくして蛇はあきらめて去っていったのである。親の覚悟の鳴き声だった。

おぼろかな ◎ 永田万年青

溪流に降り始めたる濃山吹
 山吹の宮の一隅灯しけり
 信濃なる何処の庭も濃山吹
 山道に迫りてゐたる濃山吹
 春暁や朝餉のあとの坊主刈
 春暁やアラム前に目覚めゐて
 まくら下紙と鉛筆臙なる
 臙かな海の青さの消えてゐて
 黄砂降る水平線の消えがてに
 雨の中つばくらめ巢に戻りけり

酒吞(ささの)抄

裸足の子 ◎ 谷口 一献

万葉を偲ぶ縁の濃山吹
 真白なる明石城址に青嵐
 不順とは週毎に来る更衣
 文字読めぬ墓数多あり麦の秋
 青芝に陽と遊びゐる裸足の子
 海の香を浴びて清和の陽を浴びて
 匂ひ来る姿見えねど栗の花
 十葉や雨の暗さの花灯り
 薫り来るブレンドの風ハーブ園
 故郷の句碑守りゐる楠若葉

臙かな海の青さの消えてゐて

「海にそそいだ光が海中の物質にあたつて反射すると、吸収されにくい青色の成分が多くなる」と百科事典に。しかし。それでは納得できない。おそらく海は青いインキで出来ているに違いないと子どものころは瀬戸内海を見て信じていた。だから、臙な春には目まで臙になって。物の色を見分けられないのだ。と言えば「ほーつと生きてんじやないよ」とチコちゃんにしたられそうだが、春の臙に見える風景はものの反射もおぼろになるので色がわからなくなると思う。ちがう？目ではなく脳の錯覚？、もう一句枕の下紙は寝ていて思いついたことをすぐにメモ出来るよう枕の下に敷いて寝るのだらう。だが、そのような時に思いつくことは夜が明けて冷静に見返すと「なーんだ」というアイデアが多い。

青芝に陽と遊びゐる裸足の子

青芝と裸足は季重なりであるが、それで焦点が分かれる訳ではなく「青芝に子どもは一つに溶け込んでいて芝生と裸足の子は一体になっているから、気持よく遊ぶ子どもの様子が伝わり、季重なりの弊が表れる割れることはないと考え。個人的であるが私が子どものころ芝生の上を走っていたら割れたピンがあった土踏まずの動脈をザクッと切ったことがあり血が止まらず医者に運ばれたことがある、こういう場面に出会つとそのことを思い出し恐怖が蘇る。しかし句はその罪はなく、「陽と遊び」というのが明るく輝いて佳い。そのほか一献の今月の句には栗の花の匂い、十葉ハーブ園の薫りなど五月に相応しい句に満ちている。天候不順による更衣も大変。

青き踏み ◎ 田尻 りさ

堀の水姿見にして山桜

青き踏み源流目ざす家族かな

まなうらによみがへる日の梅の花

野あそびの子等皆赤き茎をかむ

同級生にくぎ煮送りて息をつく

リストカット皺に消えたり春はやて

一日だけががんばりました野萱草

寒天より君を下ろして抱きしむる

我が心ここにあらずや春の池

花しべの赤黄緑混りけり

青き踏み源流目ざす家族かな

青き踏みは中国の古俗で、春先に野に出て青草を踏んで遊ぶ行事にちなむ季題でリサの家族はピクニックとして川の上流、源流を健康的に目指す。神戸の垂水の上流には源流もあるのだろう。垂水とは滝のことでもある。

△「手首の傷」も高齢の今となつては、皺になつてしまつたよと、自虐の句。自虐というよりも相当の年月がリストカットの過去を消えさせてくれたよと、いうのである。皺で見えなくなつても過去の傷がいやされる訳はないが、今では客観的に自らを茶化すことができるようになったことはいいこと。あとは健康に留意して長生きで俳句をどんどん進めることだ。りさには未完のよろしきがある。

箕面抄

十倍の極辛 ◎ 出口 誠

子のために食事を作る春の宵

子の教へしつかり守る春の宵

ゲーム機のなかなか進まぬ春の昼

十倍の極辛カレー春の昼

大地から赤白ピンク芝桜

春の昼自分自身にいらいらす

春の雨我が靴の滑りやすきこと

また一つ不安の増えて春の宵

春の夜同じことばを二百回

春の昼不安で不安でたまらない

十倍の極辛カレー春の昼

春の昼とは長閑で優しい気分の漂う日中だが、一方冬から穏やかな気候になつて、自律神経も狂いがちである。また春眠から冷めやらぬ朝のちやもやとした気持を引きずつて昼間も気分がはつきりしないことも。そこで、飛び切り極辛のカレーで気分を目覚めさせようというわけである。私の知る限りでは十年ほど前に神戸三宮にスープカレーの店があつてそこでは八十倍までの辛さのカレーがあつた。食べたことはないが店長に聞いてみると辛さに強いという店長も三十倍辛いのが限界だと言つていた。知人も三十倍までは食べられたが、そこで限界だと言つていた。唐辛子には『カプサイシン』という辛味成分が含まれ、カプサイシンの割合は、『スコヴィール値』という数値で示されているが、私の知っているハバナエロでも辛さは激辛の中で上位々位である。ハバナエロは辛いというより火傷の痛さで、そりゃ目が覚める。辛さの極み十位激辛以上が極辛（ごくから）？は知らない。知らなくても生きて行けるか。